

## リオ2016報告 —文化プログラムを中心に



研究理事 吉本 光宏

mitch@nli-research.co.jp

9月18日、リオデジャネイロ2016オリンピック・パラリンピック競技大会が終了し、いよいよ2020年の東京大会が4年後にせまってきた。

8月半ばから約2週間、アーツカウンシル東京の依頼でリオに滞在し、文化プログラムを中心にリオ2016大会の視察と調査を行う機会に恵まれた\*1。詳しい調査結果は改めてまとめる予定だが、ここでは文化関係の事業を中心にリオ2016大会の視察報告として整理した。

### 1—— 組織委員会と連邦政府の取組

リオ2016組織委員会では、当初文化プログラムをセレブラ（祝祭）と名づけ、文学、大衆文化、音楽、舞台芸術、美術、ダンスの6分野の文化事業を募集し、ストリートや公園、広場、浜辺などで展開する計画だった\*2。そのために2種類のロゴマークも用意されたが[図表1]、残念ながらリオ滞在中にそのマークが付与された文化事業を見かけることはなかった。

関係者の話を総合すると、大統領の弾劾問題など不安定な政治情勢の中、屋外の公共スペースで人々が集まる催し自体が忌避されたことに加え、経済的にも厳しい状況から、組織委員会で計画されていた文化プログラムはほとんど実施されなかった、というのが実情のようである。

そんな中、5月に日本のブラジル大使館でも発表された日本人アーティスト森万里子の立体作品『Ring : One with Nature』は、リオ2016大会の文化プログラムの一環として設置が決まったものだ。現地の報道によれば\*3、セレブラ文化プログラムの一部としてリオ州内の公園で8月3日に公開されている\*4。

それに対し、連邦政府文化省はリオ市の文化事業を支援したほか、「アート・モニュメント・ブラジル2016・オリンピック2016」という公募プログラムで「スポーツとアートの接点」をテーマにした作品を募集。281件の応募から彫刻や短編映画など23件を推薦、今後資金援助を行い、年内に完成させる予定だという\*5。

またブラジルには「ルアネー法」という民間企業の文化事業への支援を後押しする制度がある。一定の条件に合致すれば、文化事業に投資した額が税金から控除される、というもので、映画製作などではよく使われるという\*6。リオ2016大会の公式スポンサーの中にも、このルアネー法を活用してオリンピックの文化事業を実施したところがあれば、間接的に連邦政府が支援したことになるが、残念ながら現時点では確認できていない。

### 2—— リオ市の文化支援とパスポート

一方開催都市のリオデジャネイロ市は、今年5月から9月までをオリンピックの文化期間とし、劇場や博物館、美術館、文化センター、図書館、屋外広場などで公演や展覧会、コンサートなど数多くの文化イベントを実施。それらの鑑賞を促す「文化パスポート（Cultural Passport）」を発行した。

事前に専用のウェブサイトで登録し（ブラジル国民は無料、外国人は15レアル（約

[図表1] リオ2016大会の2つのセレブラマーク

出展：リオ2016組織委員会、CELEBRA MARK FOR CULTURAL PROJECTS(2016.2.19 リオ大会HPからダウンロード)



[写真1] 文化パスポート





よしもと・みつひろ  
89年ニッセイ基礎研究所。  
東京藝術大学(2012-/2000-09)非常勤講師。  
文化庁文化審議会文化政策部会委員(2014-/2004-11)、  
東京芸術文化評議会評議員・文化プログラム検討部会部会長(2014-)他多数。

500円))、市内5箇所の発行所で受け取った文化パスポートを美術館や劇場に持参すれば、割引もしくは無料で展覧会や公演を鑑賞できるという仕組みである。

登録用のウェブページはポルトガル語と英語で用意され、文化パスポートで鑑賞可能な文化イベントのリストと各施設へのリンク先も、ポルトガル語のみだったウェブページで公開されていた。

しかし8月15日の午前中(日本時間)、登録をしようとウェブページにアクセスしたところ、サイトは存在しなくなっていた。前日には閲覧可能だったため技術的な問題だと思い、リオに到着後何度かトライしたが同じ状況で、文化パスポートの受け取り場所の一つだったリオ市の文化センターで確認したところ、「It's over」という答えが返ってきて戸惑うこととなった。

やがて当該サイトを検索すると、「Por determinação do Tribunal Regional Eleitoral está SUSPENSO O PROGRAMA PASSAPORTE CULTURAL RIO (地方選挙裁判所の裁定

により、文化パスポートは停止中)」という表示が出るようになった。後日、リオ市文化局へのインタビューでその真相が明らかになった。リオ市では今年10月に市長選が行われる予定で、文化パスポートは公職選挙法が選挙の年に禁止している公共財サービスの無償提供にあたるという司法判断が下されたため、文化パスポートの発行が打ち切られてしまったということだった。

しかし既に20万枚近い文化パスポートが発行されており、その使用は継続されていた。滞在中に訪問した美術館の中には、チケット売場に文化パスポートのステッカーが貼られているところがあり、受付で尋ねたところ「多くの人が文化パスポートを利用し、通常より外国人の入場者も多い。ただし展示はオリンピックやパラリンピックのために特別に企画されたものではない」という答えが返ってきた。

またリオ市では、2015年の後半にオリンピック・パラリンピックの文化プログラムの公募を行って資金的な支援を実施した。リオ市の資料によれば、その概要は次

のとおりである\*7。

応募総数は1,078件で採択は153件。その内訳は、公的機関が26件、民間機関が23件、ポピュラー・シーズンが25件、個別事業へのサポートが68件、芸術へのアクセスの支援が11件となっている。5~10万レアル(約160~310万円)の範囲で、少なくとも130件の事業に総額1,000万レアル(約3億1,000万円)が支給された。オリンピック開催中には1日当たり131件、合計で2,228件、パラリンピック開催中には1日当たり109件、合計1,306件の文化イベントを実施するという内容になっている\*8。

文化パスポートはこれらリオ市が支援する事業に加え、民間も含む文化施設が対象になっており、パスポートには博物館・美術館52、アリーナ等14、文化センター10、図書館11、プラネタリウム1、劇場12のリストが掲載されている。美術館や劇場にとっては、入場料収入が減ることになるが、来場者数が増えれば、物販や飲食の収入にも結びつき、結果的に収入増になるという戦略だ。

文化パスポートの目的は、市民の文化鑑

[写真2]文化パスポートのステッカーが貼られた美術館受付(左)とブースだけが残された文化パスポートの発行所(右)





賞を促進することで、ブラジルの27州すべてから登録があったことからその目的はある程度達成されたはずだ、というのがリオ市文化局の見解だ。

なお、文化パスポートにはリオ2016大会のエンブレムが掲載されており、リオ市は組織委員会の了解を得て使用したとのことだった。表紙にはオリンピックカラーをイメージさせるデザインが施されており、当初は「オリンピック文化パスポート」という名称を予定していたが、結果的にオリンピックという用語は使えなかったそうである。

### 3—— 港湾エリアの再開発とvisit rio

大会期間中、リオ市内で文化的にも最も注目できる場所は旧市街地のMaravilha

港エリアの再開発にあわせて設置された「オリンピック大通り (Boulevard Olímpico)」であった。その一帯はブラジルの歴史上でも重要な場所であるが、近年では建物の老朽化が進み、一部は廃墟となるなど、すっかり荒廃してリオ市内でも最も危険な地域となっていた。

リオデジャネイロ市は、連邦政府、州政府の協力を得て500万㎡のエリアに、15年間で80億レアル(約2,500億円)の投資を誘致して再開発を進める計画で、2016年のリオ大会を目指して、急ピッチで整備が進められてきた。

ウォーターフロントを覆っていた高速道路が撤去され、埠頭には巨大な未来博物館 (Museum of Tomorrow) を建設、2年前にはリオ市の美術館も開館している。一

部工事中の区間が残されているがLRTも敷設され、サイドウォーク (計画では65万㎡)の整備や1万5,000本の植樹も進められている。

そのエリア一帯をオリンピック大通りとして市民に開放、大小3つのライブサイトが設置・運営された (図表2の②③④)。中心部にはスタジアムのものよりかなり小ぶりだが、聖火台が設けられ (図表2の①)、聖火の前では市民が思い思いのポーズで記念写真を撮っていた。

他にも、リオ2016大会の公式スポンサーの各種アトラクションや展示施設などを設置。例えば、日産自動車はクレーンを使ったバンジージャンプを、地元ビールメーカーのSkollは世界最大級の気球をそれぞれ設営。コカ・コーラは港湾地区

〔図表2〕リオ市旧市街のウォーターフロントに設営されたオリンピック大通り (Boulevard Olímpico)

出典: リオ市観光局、visit rio magazine august 2016, #8



[写真3]オリンピック大通りの様子(左:聖火の前で写真を撮る市民たち、右:ライブサイト)



の倉庫を改修して「Parada Coca-Cola (Coca-Cola Station)」を開設、コンサートの他、アスリートや著名人の登場するイベントを実施した。

ライブサイトでは、競技会場に出向かなくても各種競技が巨大なスクリーンでライブで見られる。ブラジル選手が登場する試合では多くのリオ市民が熱狂していた。競技のライブ上映の合間には、音楽やダンスなどのイベントを次々に開催。大音量に合わせて踊るリオ市民の姿が印象的だった。

これらオリンピック大通りの文化イベントをコーディネートしたのはリオ市観光局で、彼らの発行したvisit rio magazineの特別号には、ライブサイトの催しだけではなく、リオ市の観光案内、オリンピック会場等の基本情報が掲載されている。

オリンピック会期終盤の8月18日(木)と19日(金)はリオ市長によって特別の休日となったため、オリンピック大通りは市民でごった返していた。現地の方によれば、オリンピック開催をきっかけに再開発によってこのエリア一帯が清潔で安全な場所になったこと、文化的な拠点が整備され

て憩いの場になったことを、リオ市民はたいへん歓迎しているということであった。

#### 4——国際交流の拠点、各国ハウス

もうひとつ、リオ2016大会中の文化事業として見逃すことのできないのが、各国が設置した55のホスピタリティ・ハウスでの取組である。一部は招待客のみを対象としていたが、多くは一般に広く開放され、各国の観光案内や文化イベント、アトラクションなどを楽しむ来場者で賑わった。

日本が出展した東京2020ジャパン・ハウスはバッハ地区に数年前に開館したリオ市の大規模な複合文化施設「Cidade das Artes」に設けられた。東京2020大会の概要を紹介するエリア、日本食のPRや8Kの映像体験、観光情報などを紹介する日本政府エリア、東京以外の全国46都道府県を紹介する自治体エリアなど、7つのエリアで構成。中でも「茶道」「浴衣」「書道」「ヨーヨー」の4つの日本文化を体験できるエリアは人気で、どれも長蛇の列ができ、ブラジルにおける日本文化への関心の高

さがうかがえた。

海外のホスピタリティ・ハウスでは、アフリカの54ヶ国が共同で出展したカーサ・アフリカ、4,100㎡というスペースに様々なアトラクションを用意したスイス・ハウスなども訪問したが、印象に残ったのは英国のブリティッシュ・ハウスである。招待客のみを対象に毎日様々な文化イベントが実施されていた。ロンドン市の招待で訪れた「MADE IN LONDON!」では、ロイヤル・オペラやロイヤル・バレエの団員による短いパフォーマンスの後、ロンドン発の文化が映像で次々に紹介される。最近亡くなったデビッド・ボウイの映像や音楽など、ロンドンがこれまでいかに世界のアートシーンをリードしてきたかを再認識させられる。

ドリンクやフードのサービスも美味しく、英国料理に対する悪評をすっかり忘れさせてくれる。最後はマイクと肉声だけを使ったパフォーマンスで知られるビートボックス・コレクティブのライブが続いた。

各国が趣向を凝らした展示や文化イベントを展開するホスピタリティ・ハウスは、



[写真4] 東京2020ジャパン・ハウス(左:日本文化体験コーナー)とブリティッシュ・ハウス(右:Made in London!)



オリンピック・パラリンピックを舞台にした国際文化交流の拠点として機能しており、東京2020大会でもその役割が大いに期待される。

## 5—— CULTURE & TOKYO in RIO

次回2020年のオリンピック・パラリンピック競技大会の開催都市である東京都は、早くから文化プログラムの実施を睨んで準備を進めてきた。その一環としてリオで開催されたのが、CULTURE & TOKYO in RIO 及び TOHOKU & TOKYO in RIOで、図表3に示した3つの文化事業が実施された\*9。中でも「TURN (ターン)」は今後の展開に大きな可能性を感じさせるものだった。

TURNは、異なる背景や習慣を持った人々が関わり合い、様々な「個」の出会いと表現を生み出すアートプロジェクトで、監修者の日比野克彦によって名付けられたものだ。これまで、野田秀樹の東京キャラバンとともに、東京2020大会の文化プログラムのリーディングプロジェクトとして

[図表3] CULTURE & TOKYO in RIO 及び TOHOKU & TOKYO in RIOの概要\*9  
出典: アーツカウンシル東京の提供資料に基づいて作成

### 東京キャラバン

劇作家・演出家・役者である野田秀樹の発案により、多種多様なアーティストが出会い“文化混流”することで、新しい表現が生まれるというコンセプトを掲げた新たな文化ムーブメント。リオでは才能溢れる様々なジャンルの日本人アーティストが現地のアーティストと出会い、国境、言語、文化やそれぞれのジャンルを超えた文化混流ワークショップによって、創作公演が行われた。

### TURN

アーティストの日比野克彦による監修のもと、異なる背景や習慣を持ったさまざまな人々との出会い方、つながり方に創造性を携え働きかけていくアートプロジェクト。日本及びブラジルを拠点に活動するアーティストたちが伝統工芸を携えて、サンパウロに滞在しながら福祉施設に通い、施設を利用する障がいのある人や地域の人たちなどの日常に触れながら関わり合っていく交流プログラムを実施。そのプロセスを通して生まれた作品等を展示するとともに、ワークショップ、カンファレンスが開催された。

### TOHOKU & TOKYO in RIO

“東京”と東日本大震災の被災地“東北”の復興と世界に向けた感謝をアピールする事業。東京からは、江戸文化を現代に受け継ぐ伝統芸能「江戸鳶木遣り」、東北からは土地を浄め鎮魂を意味する郷土芸能「じゃんがら念仏踊り」(福島県)と「鬼剣舞」(岩手県)が一堂に集結。日本とブラジルの友好の証として、日本から「サンバ(工藤めぐみ)」、ブラジルから「和太鼓チーム(生・しょう)」なども参加。オリンピック大通りのライブサイトやTOKYO 2020 JAPAN HOUSEで公演を行った。

[写真5]TURN展の行われたパソ・インペリアルの外観と展示・ワークショップの様子



実施されてきたが、TURN in BRAZILでは、4名のアーティストたちが日本やブラジルの伝統文化をモチーフに活動を展開した。まず、東京や宮城県南三陸町で研修を行った後、サンパウロの福祉施設、障がい者施設で1ヶ月以上にわたり交流プログラムを実施。リオではその成果を展示するとともに、来場者を対象にしたワークショップが実施された。

アーティストの五十嵐靖晃は、まず東京で帯締めや羽織紐に使われる「江戸組紐」の職人から2ヶ月にわたって指導を受けた。その後サンパウロでは自閉症児療育施設「PIPA」に通い、子どもたちと交流。本来の絹糸ではなく木綿の糸を使用し、糸巻き等組紐の工程も含め、1本の組紐を複数名で編める巨大な角台を使って「PIPA」の子どもたちやリオ会場の来場者とともに大蛇のような組紐を作り上げた。その木綿の糸も、東京・町田市の福祉施設「クラフト工房La Mano」とサンパウロの「PIPA」で藍染をしたものである。

ワークショップファシリテーターの瀧口幸恵は、東北沿岸に古くから伝わる神

棚飾りの切り紙「きりこ」の研修のため宮城県南三陸町に1か月間滞在し、学校や地域の人々とのワークショップに取り組んだ。ブラジルではサンパウロ近郊の福祉施設「Monte Azul」に滞在し、子どもたちや地域の人たちと「きりこ」づくりを行った。リオでは会場にきりこの型紙を用意し、来場者がきりこを作成するワークショップをコーディネートした。

日系ブラジル人アーティストのタチ・ポロは「江戸つまみ」の心と技術を習得するため、1ヶ月間東京に滞在。江戸つまみは、正方形の薄絹をつまんで折りたたみ、組み合わせることによって花や鳥の文様を作る江戸時代から伝わる伝統工芸である。ブラジルに帰国後、彼女はサンパウロの知的障がい者施設「こどもの園」に通い、入所者の日常に寄り添いながら、一緒に江戸つまみを制作した。リオでは、色とりどりのつまみを組み合わせたインスタレーションを展示し、来場者を対象に江戸つまみのワークショップを行った。

同じく日系ブラジル人アーティストのジュン・ナカオは、ブラジルの伝統的な力

ゴ編み「セスタリーア」を題材に、サンパウロ市に隣接するグアルーリョス市で最も古い日系の高齢者介護施設「憩の園」に通って、お年寄りと協働で独自の作品づくりに取り組んだ。入所者一人ひとりを金網越しに抱きしめて型を取り、その金網の人型にセスタリーアの技術を使ってテープを編みこんで作品を制作、リオの会場に展示した。

TURN、東京キャラバンともリオの会場はパソ・インペリアル(インペリアル・パレス)。ブラジルの独立宣言が行われたという由緒ある歴史的建造物で、現在は美術館として活用されている。外壁にはきりこの装飾が施され、TURNには連日長蛇の列ができ、18日間でパソ・インペリアルには4万人以上が来場して展示等を鑑賞し、そのうち約1万5,000人がワークショップにも参加した。江戸組紐やきりこ、江戸つまみのワークショップに熱心に取り組むリオっ子の姿が忘れられない。単なる日本文化の紹介に終わることなく、事前のリサーチと入念な準備を経て、こうした事業を実現した監修の日比野克彦や4人のアーティストたち、関係者の方々の尽力に頭が下がる思いがした。



TURNには障がいのあるなしに関わらず、アートの力を媒介に人間本来のもつ能力を引き出し、共有していこうという狙いがある。サンパウロの福祉施設や障がい者施設で行われた活動は、日本やブラジルの伝統文化を媒介にしなが、障がい児や高齢者の可能性を引き出すとともに、アーティストにとっても新たな学びや発見の機会となったに違いない。2020年に向けて今後の展開が楽しみな事業である。

なお、パン・インペリアル2階では国際交流基金の企画で「コンテンポラリーの出現・日本の前衛美術1950-1970」も同時開催されていた。日本が大きな変貌を遂げた1964年の東京オリンピック前後の時代に焦点を当て、実験精神にあふれる作品を紹介するもので、非常に見応えのある展覧会だった。

## 6——東京2020に向けて

冒頭で紹介したように、リオ2016大会の文化プログラムは、残念ながらロンドン

2012大会に比べて低調だったと言わざるを得ない。1992年のバルセロナ大会から継続されてきた文化オリンピック（前大会の終了年から4年間行われる文化プログラム）も継承されなかった。果たして東京はリオから何を学ぶべきだろうか。

東京2020組織委員会では、既にロンドン2012大会を参考にプランを練り、文化オリンピックの準備を進めている。リオ大会ではそうした「公式」の文化オリンピックはほとんど実施されなかったが、それでも本稿で紹介したように、多様な文化事業が展開されていた。

東京2020大会では、組織委員会の文化オリンピックを強力に推進するとともに、必ずしもそれにこだわることなく、もっとおおらかに文化プログラムを展開できる可能性があるのではないかと。リオ大会を視察して感じた素朴な印象である。実際、内閣官房では組織委員会とは別に「beyond 2020」という枠組みも用意し、多様な文化事業への支援をスタートさせている。もちろんオリンピックブランドを

不正に使用するアンブッシュマーケティングへの規制など、オリンピックのルールは厳密に守らなければならない。

しかしそれを前提に、ロンドンとリオを組み合わせたとような展開ができれば、東京2020大会では、五輪史上かつてない文化プログラムが実現すると思うのだが、いかがだろうか。

【\*1】現地での調査は太下義之氏(三菱UFJリサーチ&コンサルティング)と共同で実施した。

【\*2】吉本光宏「ロンドン2012大会 文化オリンピックを支えた3つのマーク」ニッセイ基礎研レポート 2016-07-11

【\*3】The Rio Times, Mariko-Mori's Olympic-Themed Installation in Rio State, 2016.9.9

【\*4】この作品が文化省の「アート・モニュメント・ブラジル2016・オリンピック2016」の一部であるかどうかは不明。

【\*5】高橋ジョー「いま、ブラジルは世界に向けてアートを発信する」アートスケープ 2016年08月01日号

【\*6】高橋ジョー氏へのインタビューに基づく。

【\*7】Levantamento da programação cultural nas Olimpíadas e Paralimpíadas (オリンピック及びパラリンピックの文化プログラムに関する調査)

【\*8】1件の事業で複数日もしくは複数回の文化イベントが実施された。

【\*9】CULTURE & TOKYO in RIOでは、「東京ブランド」の紹介やPR映像の放映、伝統文化の浮世絵や現代の東京の観光スポットの写真のパネル展示を通して、旅行地としての東京をアピールする「東京観光PR展示」も実施された。

【写真6】サンパウロの福祉施設、障がい者施設で行われた活動の様子(左:五十嵐靖章の「PIPA」での活動。右:滝口幸恵の「Monte Azul」での活動。)

撮影: RAFAEL SALVADOR

